

日本における在日コリアン文学受容の一側面

—李恢成「砧をうつ女」の高校国語教科書採用と それ以後の軌跡—

金 貞愛

一、はじめに

日本の戦後における国語教科書には、自国の文学作品以外にも、西洋文学の詩や小説、中国の古典や現代文学の翻訳など、多くの外国文学作品が掲載されてきた。しかしながら、在日コリアン文学が日本の国語教科書に取り上げられるようになるのは、戦後50年ほどが経過し平成の時代に入ってからである。これほどまでに多くの時間を要したことからすれば、1990年代以降、堰を切ったように在日コリアン文学が国語教科書に掲載されはじめたのは、ある意味画期的な出来事とも言える。

「国語」や国語教育が国民国家のイデオロギーを補強するための社会的システムのひとつであることは言われて久しい。だとするならば、民族的マイノリティである在日コリアンの文学が日本の国語教科書に採用される意義はどこにあるのだろうか。それは国民国家のイデオロギーを補強するための装置なのか、それとも多民族国家ないしは多民族共生をめざすという理念にもとづく革新的な試みなのだろうか。

こうした疑問に答えるためには、在日コリアン文学のそれぞれの作品がどのような経緯を経て教科書に収録されたのかを丹念に明らかにすることが必要になるだろう。稿者は今回その契機とするために、李恢成という作家に注目したい。

1935年樺太（現サハリン）に生まれた李恢成は、1969年デビュー作「またふたたびの道」（『群像』、6月）が第12回群像新人賞に選ばれ、華々しく表舞台に現れた。その3年後、太平洋戦争の終結を数ヶ月残して36歳の若さで亡くなった実母張述伊をモデルとする小説「砧をうつ女」（『季刊芸術』第18号、1971年夏）により芥川賞を受賞する。これは外国籍作家による初めての芥川賞受賞という栄誉を彼に与えた。とりわけ「砧をうつ女」は、日本の国語教科書に収録された在日コリアン文学作品の最初期のものであり（1994年発行、日本書籍『新版 高校国語Ⅰ』）、今回注目する1990年代の一連のブームの嚆矢となっているのである。

国語教科書の戦後史を丹念に追いかけた佐藤泉は、その著書において「戦後の国

語教科書は、各時代が生みだし押しだそうとした理念や、教育制度や、その背景をなす政治動向や、その他さまざまなレベルの意味の領域に一举に関わり、関わりながら変化していった」¹と指摘している。この指摘に従うならば、李恢成の作品が日本の国語教科書に収録される意義もまた、その時期における時代の理念、あるいは当時の教育制度のあり方、さらには80年代末以降の韓国における社会情勢の変化や日本の政治動向などを踏まえることを通して浮かび上がってくるのではないだろうか。

そこで本稿では、李恢成をはじめとする在日コリアン作家の作品が日本の国語教科書で収録された経緯をたどり直し、また教育現場においてそれらの作品を通してどのような指導が求められたのかという点を検証しつつ、日本における在日コリアン文学の受容プロセスの一端を明らかにしようと思う。

二、「国際理解」と「国際協調」の時代

巻末の資料1に示したとおり、在日コリアン文学作品の収録は、すべて1990年代以降に行なわれている。これら一連のブームは初めてのものではなく、すでに文学賞をめぐる何度かのブームが存在した。その始めは1930年代に遡る。1932年に張赫宙は「餓鬼道」で雑誌『改造』の懸賞創作に入選し、金史良は1939年に「光の中に」で芥川賞の候補となっている。また、金素雲、雑誌『モダン日本』朝鮮版、そして文学ではないが、ダンサー崔承喜の人気の高まるなど、一時朝鮮ブームが起こっている。次のブームは1970年前後に起こっている。1965年日韓国交正常化の後、在日2世作家に代表される金鶴泳、金石範、李恢成などが頭角を現し、前述したように李恢成が1972年芥川賞を受賞するまでにいたる。また、次に外国籍作家として李良枝が芥川賞を受賞したのは、韓国の民主化が始まったといわれる1989年であり、この時期以降日本と韓国の関係が急速に深まったということは記憶に新しいところである。

1930年代における内鮮一体化政策の強化、皇民化教育による日本語世代の増加や、1970年前後における日韓国交正常化以降の融和、友好化といった日韓関係の推移から考えた場合、1980年代後半は、韓国が戦後長い間続いた軍事独裁政権に終止符を打ち、1987年直接選挙による盧泰愚政権の発足をもって民主化を成し遂げた時期にあたる。この時期、韓国はアジアの新興工業経済地域として注目され、アジアのなかの「四匹の虎・竜」（韓国、台湾、香港、シンガポール）のひとつとしてまで浮上し、1986年釜山アジアゲーム・88年ソウルオリンピックの成功的開催などにより、一举に知名度をあげ、ようやく国際社会の一員として認められつつあった。国

際社会における韓国の地位向上は日本社会においても肯定的に評価され、これまでの韓国に対する負のイメージを払拭し、対等な隣国としての基盤が整い、日韓の人的移動・交流も活発化し、韓国政府は1989年1月1日をもって海外渡航完全自由化を実施、訪日が容易になった。

こうした時期に在日コリアンの文学に対する注目が集まったこと自体は不思議ではない。しかしながら、中学ないしは高校の国語教科書においてその作品が掲載されるためには、国語教育の具体的な政策における変更が生じていたと考えるべきであろう。1930年代や1970年代のブームではなく、なぜ90年代に入って国語教科書で在日コリアン文学が採用されるようになったのか。その際従来とは異なる方向性がどのように示されたのか。

1989年（平成元年）に学習指導要領が改訂されるにあたり、1987年に教育課程審議会が「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」の答申を行っている。改善のねらいは「情報化、国際化、価値観の多様化等による社会の変化とそれに伴う学習者の生活や意識」への配慮であり、示されたのは以下の4点である。①豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図ること。②自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視すること。③国民として必要とされる基礎力・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図ること。④国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること²。

この方針に従って各段階各教科の目標が定められ、さらには教材選定に関する配慮事項も指摘される。高等学校の国語で必修科目であった「国語Ⅰ」では「内容の取扱い」に関して、教材の選定に当たっては「表現力と理解力」の育成を目指して以下の8つの配慮事項が定められた。そのなかで、最後の項目では「広い視野から国際理解を深め日本人としての自覚をもち、国際協調の精神を高めるのに役立つこと」と記されている³。これは従来の学習指導要領には示されなかった点で、在日コリアンの文学作品が収められる基となった考えだといえる。実際、91年には李良枝「由熙」が採用された⁴。これは1978年の学習指導要領に基づく時期の教科書だが、4年ごとに教科書内容の見直しを行うなかで、いち早く次期学習指導要領の実施を視野に入れて教材を採用したと考えられる。教科書では「現代の表現」という単元教材のひとつとして、村上春樹の小説「螢」（『ノルウェイの森』より）とともに収録された。この意味では、たしかに「現代文学」の担い手として李良枝が村上春樹の作品とともに扱われているのだが、日本語を母語にする在日コリアンの女性が韓国での留学生活を描く小説の内容からすれば、「広い視野から国際理解を深め日本人としての自覚をもち、国際協調の精神を高める」ための格好の素材となり得

るという点から、在日コリアン文学が日本の国語教科書に採用されるきっかけとなったと考えられる。

その一方で、教材選定に当たる配慮事項には、「我が国の文化と伝統に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」という項目も存在した⁵。これらの項目は先ほどの④の方針に基づいた内容である。したがって両項目は背反、矛盾するものではなく、両者が補完的關係であることを求められている。つまり、国際化の機運が高まれば高まるほど、そこでの競争に耐えうる自国の文化観、国家観が要請されるという認識を示している。もちろんこれが国際化と国民化の唯一の關係性を示すものではない。だが、この時期の国語教育においてはそれらが表裏一体として捉えられたという前提を踏まえる必要があるだろう。

というのも、李恢成「砧をうつ女」のインパクトがその後在日コリアン文学における「身世打鈴」という「ジャンル」を見いだす契機となったことにその意味があったのだとすれば、これがそのまま「日本人」向けの教材としての意義となりうるのかが疑問として浮かんでくるためだ。「日本」における「国語」教材として位置づける文脈はまた別種のところにあることは容易に推測できる。では実際に教科書の単元の指導においてはどのような形で現れてくるのか、李恢成の「砧をうつ女」を題材として次に考えてみたい。

三、高校国語教材としての「砧をうつ女」——日本書籍版（1994年）

「砧をうつ女」の物語の中心を占めるのは、「日本の長い戦争がもう十ヶ月もすると終りを告げる冬のある日」に亡くなった、母「張述伊^{ジャンヌリ}」を33歳の「僕」が回想するというストーリーである⁶。当時「僕」は9歳だった。そのため、幼かった「僕」は6歳頃から母親が死ぬまでのいくつかの断片的な記憶しか持っていない。そこで、祖母からよく聞かされていた独特のリズム・メロディーに助けられつつ、かすかな記憶の断片をつないでいく。「僕」には祖母がまるで「哭き女」のように「あられもない取り乱し方」を見せながら母のことを語ってくれたことが強烈な印象とともに残っているのだが、後にそれが朝鮮で俗に〈身勢打鈴^{シンセタリヨン}〉と呼ばれるものであることを知る。

内容構成をみると、母の死が冒頭にあり、祖母の追憶による母の生い立ちを織り込みつつ、少年時代の母の姿が描き出される。最後に再び、母の死に戻り、母の追憶にひたる夫、それらを回想する「僕」の思いで結ばれている。

この小説を国語教科書（「国語Ⅰ」）で採用したのは日本書籍（1994年、『新版高校国語一』）と角川書店（1998年、『高等学校新国語Ⅰ』）である。分量としては

中篇小説（文庫で37頁分、400百字原稿用紙で約65枚ほど）に近い作品であり、どちらの場合にも全文を掲載するには無理があったようだ。したがって、母の死に関する部分を含めて前半部分がかなり省略されている。省略が少ない角川書店版からみると、語り手「僕」の母張述伊との思い出（寝小便など）、「国語」の授業中病院に呼ばれたこと、葬式の模様、周りの変化（親戚が優しくなる）などが描かれている部分が削られている。それからこの作品の特徴である祖母の身世打鈴（節をつけて語る身の上話）の箇所は生かされ、再度省略（文庫で約7頁分）をはさんで「僕」の身世打鈴につながる（この作品において「シンセタリオン」の漢字表記は重要なポイントのひとつであるが、これについては後述する）。一方、日本書籍は前半部を思い切り削除し、角川書店の第3段の「母の思い出」から載せている。

戦後の高校国語は1948年に新制高校がスタートして以来、学習指導要領の改訂にともない6度（1952年、1963年、1973年、1982年、1994年、2003年）、科目改組や新設など大きくその姿を変えてきた。阿武泉の論⁷を参考にすれば以下のような特徴が見られる。まず、1982年から国語Ⅰ、国語Ⅱ、現代文と区分が変わり、1、2年で現古漢合冊が復活した。そのため国語Ⅰ、Ⅱの一教科書で採用される小説の数は減り5作品程度となり、「各時代を代表する作家・作品に再録作品が固定化してくる」⁸傾向が強くなった。また次の改訂実施時期に当たる1994年からは山田詠美や吉本ばなななどの現代作家が採用されるようになり、前の時期に採用された村上春樹とともに「一気に若者に支持される作家たちの解禁となった」⁹。

「砧をうつ女」を収録した日本書籍の教科書『新版 高校国語一』の場合、小説は三浦哲郎「とんかつ」、北社夫「岩造の話」、芥川龍之介「羅生門」、井伏鱒二「へんろう宿」を掲載していた。「羅生門」はもちろん、三浦哲郎「とんかつ」も現行教科書まで採用されている定番教材のひとつである。また、北社夫、井伏鱒二も複数の国語教科書に採用されている作家である。そのなかで「砧をうつ女」は異色だったといえる。

小説以外の教材を含めてみると、顕著となるのは異文化理解に対する積極的な姿勢である。「異郷での発見」の単元に石川好「ストロベリー・ロード」、「世界への視点」の単元に山室英男「国際理解の方法」と山崎正和「エスニック・ジョークと文化論」が収録されている。そして平和教材である「体験を語る」単元の向田邦子「ごはん」の後に置かれたのが「光を求めて」という単元に入った「砧をうつ女」だった。

まず本文では省略された前半部分のあらすじから見てみよう。この部分は本文の内容を誘導する意味で重要であり、後述する角川書店版と教材の扱い方が対照的になっている点が端的に現れている。

ぼくの母、張述伊が三十三歳で没したのは、日本が長い戦争に敗れる十か月ほど前であった。母は慶尚北道の古都慶州にほど近い農村で生まれた。勝ち気で美しかった彼女は村の若者たちのあこがれの的であった。しかし、当時の朝鮮は日本の苛酷な植民地支配の下にあって、彼女の運命も狂わざるを得なかった。疲弊した村を離れて十八歳の張述伊が日本に渡ったのは家庭の事情もあったが、このまま暗い運命に埋もれてしまいたくなかったからである。

だが、日本での生活は苦しかった。三年で故郷に帰るという約束も果たせず、日本の炭鉱で知り合った父と結婚し、北海道から樺太（現在のサハリン）へと移住していった。十年後、既に三児の母となった張述伊はいったん帰郷すると、ぼくの祖父母を伴って樺太に戻る。樺太での生活に慣れぬ祖父母と厳しい現実流されそうになる夫との間に立って民族の誇りだけは失うまいとする母。険悪で不安な日々が続いていた¹⁰。

日本書籍版の場合には、「苛酷な植民地支配」といった表現、ないしは「彼女の運命も狂わざるを得なかった。」といった表現など、植民地支配の激しさ、厳しさを示唆する言葉が散見される。これは教科書ばかりでなく、指導書のほうにも性格の違いとして現れている。日本書籍の学習指導書は、「これまで日本の教科書には、原爆、空襲など戦争の被害者の立場で書かれている教材がほとんどで、侵略者、加害者の視点が欠落していた」ため、「本教材の学習により、改めて植民地時代の在日朝鮮人の苦しみを知」ることができる¹¹と謳っている。また、指導書には参考資料として植民地支配の歴史に関する年表を施しているなど、植民地支配下の朝鮮に関する歴史認識を非常に意識した構成となっている。

日本書籍はおもに小中学校の教科書を出版していたが、この時期は高校の国語と社会についても扱っていた¹²。同じ時期の高校日本史の教科書を見てみると、「主題学習」と銘打たれた箇所があった。その一つが「アジアのなかの日本」というものだった。明治期の日本の対外進出について、周辺アジア諸国が独立への希望と失望を抱いたという内容を綴った「日露戦争の勝利とアジア」や、資本主義による搾取の構図を示す「えびとバナナと日本人」といった欄が設けられていた。

こうした歴史記述は、1990年代に日本でもさかんに紹介されたポストコロニアリズムが背景となっていると考えられる。歴史に関する宗主国、植民地間の認識の相違とそれに対する克服の試みが大前提となっているが、日本史における歴史認識が国語においても共有されているように見えるのは単なる偶然ではなく、文学研究においても積極的に在日コリアン文学の位置づけが議論されていたからこそだと考えるのがより自然であろう。指導書に挙げられている「◎同じく現代文学に関するも

の / 『植民地と文学』日本社会文学会編（オリジン出版 一九九三） / 『在日朝鮮人日本語文学論』林浩治（新幹社 一九九一） / 『李良枝全集』李良枝（講談社 一九九三）¹³といった参考文献からもその一端がうかがえる。

では、小説「砧をうつ女」を教材としてどのように扱おうとしていたのか、教科書の本文に即してさらに見てみたい。日本書籍版が本文の冒頭として取り上げるのは以下の部分からである。

「私の子供でない——。」

母は何かのときにこう言ってぼくを困らせたものである。戯れに言うときは、笑いながら（あるいはかえってまじめな面差しで）こう漏らすのだ。

「ジョジョや。おまえは橋の下から拾ってきたんだよ。」¹⁴

「橋の下から拾ってきた」子というエピソードは日本でもしばしば聞かれたものである。その点では、「日本人」の高校生にとって世代的な次元の距離は生じたとしても、文化的な違和感を覚えるような冒頭ではない。馴染みやすい部分から切り取ったともいえる。しかし、すぐ後に出てくる「国民学校」の語は、「一九四一年、日本の小学校は、皇国民教育を強化するため、「国民学校」と改称されていた」との注が本文の下にある¹⁵。本文採用に当たって省略された「国語」の時間が、実は皇民教育としての「国語」であったことが示される。その意味では、本文を読み取る過程について、その発端から学生に対して歴史認識に関わる記述とその解釈、説明の理解を求める部分を採用したといえる。

日本書籍は祖母、そして僕の「身勢打鈴」に関する言及が終わった地点から始まる。そうした操作によって日本書籍版が「砧をうつ女」においてクローズアップするのは、意思の強い「流されない女」、「志を持ったまま死んだ女」である。これは本文に入る前のあらすじ紹介中にもあった「民族の誇り」を持った女を主眼とする姿勢とも通底する。では、こうした「民族の誇り」を持った女という位置づけはどのようになされたのかと考える場合、重要になってくるのは、教科書作成の時期とほぼ同じ時期に刊行された講談社文芸文庫の『またふたびの道・砧をうつ女』（1991年）の存在である。

現在に至るまで李恢成文学の全集は刊行されていないし、多くの作品を収録した選集もない。したがって、テキストばかりでなく、解釈における決定版、定説と呼べるものもあるかないかという状況である。外国籍初の芥川賞受賞作である点では採用に値するとしても、そのような条件にある文学者の作品を教科書に採用する場合、どのように扱うかという点で非常に苦勞を強いられることは容易に想像される。

まさにそうした時期に、自著解説と作家案内を収録した文庫が登場した。

とくに、「作家案内」(北田幸恵)では、「砧をうつ女」について次のように言及されている。

幼少期に死別した母への狂おしいばかりの思慕は全編に溢れ、張述伊は純化され、理想化され、永遠のアニメ像として定着されている。民族的な母への賛歌・鎮魂歌が、そのまま民族を超えた〈母なるもの〉への賛歌・鎮魂歌に昇華しきった作品で、日本語で母を語った文章中でも、もっとも美しいものの一つに数えられてよい珠玉の短編である。「流されないで———」という張述伊の最期の言葉は、母に託しての作者から読者への優しく勁いメッセージであろう¹⁶。

「民族的な母」を「優しく勁く」訴えかけつつ、さらには「民族を超えた〈母なるもの〉への賛歌」ともなり得るメッセージの込められた「珠玉の短編」が「日本語」で書かれているとするならば、まさに「広い視野から国際理解を深め日本人としての自覚をもち、国際理解の精神を高めるのに役に立つ」のではないだろうか。期せず教科書収録を後押しし、お墨付きを与えるような状況も生まれていた。

このようにして、すでに李良枝という在日コリアンの芥川賞受賞作家が国語教科書に採用された実績もあり、日本におけるポストコロニアリズムの気運の高まりと、李恢成文学評価と関わる著作物の刊行が大前提となって「砧をうつ女」が採用されるに至ったと考えられる。

四、高校国語教材としての「砧をうつ女」———角川書店版(1998年)

日本書籍が「砧をうつ女」を採用してから四年後、角川書店もこの小説を教材として採用した。だが、角川書店版の場合には、歴史認識の問題が全面に展開されるわけではなく、学習指導書にある教材のねらいのなかで「高校生といえはすでに少年期から青年前期へと成長過程も進んでいるわけであるが、この時期に少年期を振り返りつつ、現在の自己を見つめることは意味あることである。」¹⁷ということからもわかるように、自己形成と青少年の問題、ないしはそこで介在する母という存在に対する思い出といったことに主眼を置き、日本書籍版とは対照的な扱いをしていることが確認できる。

採用した教材『高等学校 新国語 I』中の収録された単元は「他者と生きる」であり、たしかに日本書籍と同様の国際理解、異文化共生といった目的を持ったこと

は共通している。しかし、この小説は「比喩を群として読む」ことが求められ、他の収録作品である芥川龍之介「鼻」と立松和平「卵洗い」では「全知視点と限定視点」、志賀直哉「城の崎にて」及び、フリオ＝コルタサル（木村栄一訳）「山椒魚」については「二つの「時間」＝日本語の時制＝」の理解が目標とされていたことと一貫して、文学的手法を説明する素材としての適切性が採用の基準となっていた点で、日本書籍とは異なる要素が盛り込まれていた。文学的手法については、改訂前の94年刊行の「高校生の国語Ⅰ」において、吉本ばなな（「TUGUMI」より）「告白」と、芥川龍之介「羅生門」において、「レトリック」、安岡章太郎「球の行方」と井伏鱒二「屋根の上のサワン」において「呼称変換と視点」に関する理解を求めた方向を引き継いでいる。

今挙げた「比喩を群として読む」という項目は、本文冒頭の採用にも深く関わっていて、角川書店版は以下のように始まっている。

祖母は哭き女のように娘の記憶にふけりだす。だれに口説くともなく我が娘の生い立ちを語り始める。いとしい我が娘の一生を泣きの涙で、身をふるわせて膝を打ち付けながら……¹⁸。

角川書店版での最初の注は「哭き女——不幸のときに雇われて泣く女」であった。日本書籍が歴史に関わる注記から始まったとすれば、角川書店の場合は民族的風習に関わる記述から始まっている。注記が民族的風習から始まるのは、引用した部分のすぐ後に、「それが俗にいう、身世打鈴（身の上話。節を付けて語る）であるとは後で知ったことである。」¹⁹と続き、この部分が「身世打鈴」の記述であり小説の理解にとって不可欠であったためだが、冒頭の採用に当たっては、「哭き女のように」という直喩表現から始まるのが重要な点となっている。

引用以下、小説のなかには、「草笛が流れていくような寂しさだ」「韻律には大河の流れのような格調」「黄楊がなびくような優しさ」等、直喩が連続して登場する。「比喩を群として読む」とは、まさにこのことを示し、次々に示される直喩を文学的表現の特徴として理解させるのに適切な箇所だったのである。

文学的修辞を理解させるために「砧をうつ女」を採用したという視点から角川書店版を考える場合にさらに興味深いのは、日本書籍が原典に依拠して「身勢打鈴」の字を当てているのに対して、角川書店が「身世打鈴」としている点である。なぜこうした事態が生じたのだろうか。そもそも「シンセタリオン」という耳慣れない言葉は、韓国では「身世打令」と書くのがもっとも一般的で、韓国特有の「節をつけて語る不遇な身の上話」といったものである。そのため韓国においては口癖や決

まり文句・同じことを繰り返す言うといった意味があり、愚痴をこぼすなどの負のイメージが強く働いている表現である²⁰。

李恢成がこの小説において翻訳し、意味を解釈しなおした「身勢打鈴」、すなわち鎮魂歌としての「身勢打鈴」は、のちの「シンセタリオン」という用語が日本に定着する起源となっていく。しかし、その後「砧をうつ女」が評判を呼んだ後に言い表される「シンセタリオン」という類のタイトルの本はすべてが「身世」に「打鈴」をつけていくことになる。つまり、意味としては李恢成の「翻訳」に従って鎮魂歌というニュアンスを引き受けた「打鈴」としつつも、表記としてはもともとの使い方である「身世」が一般化していくという事態が起こっている。むくげの会『身世打鈴——在日朝鮮女性の記録』（東都書房、1972年）、古山高麗雄『身世打鈴』（中央公論社、1980年）をはじめ、のちに続く「打鈴」「タリオン」テキスト群が「身世打鈴」を使用しているので、大勢に従った結果だということはできる²¹。

祖母を中心にせず、僕の「シンセタリオン」に絞って考えるならば、「身勢打鈴」というよりは、「身世打鈴」のほうがふさわしいのかも知れない。というのも、「祖母のそのように韻を踏んでいるわけではなく、ごくありふれた語りによるものであった」僕の「シンセタリオン」は、祖母が「泣きの涙で、身をふるわせて膝を打ち付けながら」行われるのに対して、「三十三歳という女の一生が目がくらみそうなほど短く感じられた」ことへの静かな鎮魂歌であったからだ。

このようにして読者である高校生が幼少期を振り返る主人公に感情移入して読むための工夫が施されたとも考えられ、以下に挙げる参考文献群が日本書籍の場合とは全く異なることから角川書店版の特徴が垣間見える。

参考文献

時代と人間の運命・エッセイ編 李恢成 同時代社（一九九六）

知っておきたい韓国・朝鮮 歴史教育者協議会編 青木書店（一九九二）

東京の中の朝鮮 在日韓国・朝鮮生徒の教育を考える会/東京編 明石書店（一九九六）

きみたちと朝鮮（岩波ジュニア新書）尹健次 岩波書店（一九九一）²²

日本書籍と角川書店については、どのような視点から教材を採用したのかについては違いはある。とはいえ、1994年に引き続き、1998年にも採用、複数の会社が「砧をうつ女」を採用するに至った事実注目するならば、そもそも高校の国語教材として内容面での妥当性があったとも考えられる。野中潤は、国語の定番教材について「サバイバーズ・ギルト」という概念でその共通性を読み取っている²³。ある面

では「砧をうつ女」についても該当する概念である。

野中によれば、「サバイバーズ・ギルト」とは、「死者の犠牲を足場にして生きることでイノセント（無垢性）が損なわれ、汚れを抱え込んでしまった者の罪障感」²⁴である。代表作として挙げられているのは「羅生門」「こころ」「舞姫」の三作品であり、まさに定番の教材である。「砧をうつ女」を収録した角川の「国語Ⅰ」教科書も94年版には「羅生門」を収録していた。それが98年版では姿を消し、母の死を綴る「砧をうつ女」が収録されている。もちろん他の小説も入れ替わっているので一対一の関係で断定することはできないが、「現在の自己を見つめる」作業を行う教材に選ばれた「砧をうつ女」が「サバイバーズ・ギルト」教材の流れを担ったとも考えられる。

また、石原千秋が指摘しているように、少年の思い出と母親の役割を描いた作品が多く収録される傾向にある²⁵。やはりこの条件にも該当している。したがって、「砧をうつ女」は定番教材として継続して収録される要素を備えていたといえる。しかし、『少年の日の思い出』も『故郷』も外国の小説だが、過去に向いたベクトルは「古き良き日本」を引き出す機能を果たす²⁶という点をそのままあてはめることはできない。それはもちろん「砧をうつ女」から「古き良き日本」を「引き出す」のは難しいからである。

ふたたび野中の指摘を引用するならば、「サバイバーズ・ギルト」には、「戦争を踏み台にして生き残った敗戦後の日本人の生き残りの罪障感の問題に深淵を見出すことができる」²⁷とある。だとするならば、「砧をうつ女」に、ここでいう「日本人の生き残りの罪悪感」を重ねることは困難である。むしろ在日コリアンとして生き残っている経緯をたどっていけば、どうしても植民地支配の歴史が横たわっていることに眼を背けることはできなくなり、「日本人」であることの居心地の悪さを生じさせる。この意味で「定番」となり得ないだろう。このようにして李恢成「砧をうつ女」は、高校国語教材から姿を消していったのではなからうか。

五、在日コリアン文学と高校国語教科書

李恢成「砧をうつ女」が高校国語教材に採用された時期は、他の在日コリアン作家の作品にも門戸が開かれていた。1994年には鷺沢萌、李禹煥、李正子、99年にはふたたび李良枝と、次々に採用された時期に当たる。この節では現在に至る在日コリアン文学の採用状況について触れておきたい。

採用された作品や会社の数から見て圧倒的に多いのは鷺沢萌である。「ほおずきの花束」が1994年に旺文社『新国語Ⅰ』に採用されて以来、小説の主人公が高校生

と同世代であることが親しみやすいという理由で、「灯りの下に」「卒業」「ポケットの中」「指」「岸辺の駅」と次々に採用されている。彼女は「ほんとうの夏」(1992年4月)で祖母が韓国人であったことをカミングアウトしているが、在日コリアンの問題は高校の教材では採用されず、中学教材で『ケナリも花、サクラも花』(1997年)が採用されている。

そもそも「在日コリアン文学」とはいかなるものかといった場合、その定義は難しものとならざるを得ないが、鷺沢の教材採用に関しては、前節で見てきた「砧をうつ女」をめぐる日本書籍と角川書店の対照性のようなものが認められる点で興味深い。たとえば、「ほおずきの花束」を採用した東京書籍の指導書には以下のような記述がある。

祖母が韓国人であったことから、近くて遠いといわれるこの隣国にも興味を抱き、実際に現地に取材し、日韓の関係や自分の血というものに思いを致した文章も発表している。

だが、作品の多くは高校生、大学生、そしていわゆるヤングアダルトと呼ばれる年齢層を主人公に、日常における彼らの迷い、苦悩、発見をみずみずしく描いたものが主である²⁸。

実際には、後半にあるヤングアダルトの「迷いや、苦悩、発見」が教材の主となっているが、教材としての可能性をも含めて考えるならば、さらに一考の余地がある作家である。

李禹煥の場合も、同じ1994年に教材として採用されているが、題材は「在日」とは関係なく鎌倉に関する文章である。角川書店『高等学校国語2』の単元末には、「一九三六年——。現在の^{だいめいん}大韓民国慶尚南道生まれ。一九五六年(昭和三十一)来日し、現代美術作家として国際的に活躍している。」(20頁)という経歴が綴られているが、この情報と人名のほかには「韓国的」要素を持たない。芸術という普遍性を扱った題材が、その後も教材として他の文章が採用されている点で他の作家とは一線を画している。

李正子は短歌が1994年に採用されている。三省堂『国語I』の単元末には、「(一九四七 昭和二二——) 歌人。三重県に生まれた。高校生のとき、教科書収録の和歌や短歌に感銘を受け、歌作を始めた。在日韓国・朝鮮人二世として受ける差別や偏見から感じる哀しみ、怒りを率直に表現する。「朝日新聞」の歌壇欄に投稿し、多くの読者から反響を呼んだ」(208頁)と経歴の紹介があり、短歌集『ナグネタリョン』(1991年)から5句が採用されている。

単元「3 ささまざまな日本語の中で」では、リービ英雄「なぜ日本語で書くのか」も収録されていて、単元「4 くちずさむこと、うたうこと」で、寺山修司「日本童謡詩集」、小林察「五月のやうに」、松浦寿輝「詩「うさぎのダンス」の廃墟」、渡辺十絲子「詩 みずうみ」、「短歌」（岡本かの子、宮柊二、前登志夫、山崎方代、李正子）、長谷川權「俳句の宇宙」が収録されている。李正子の短歌は5句であったが、4句目中にあった「生まれたらそこがふるさと」という部分は、後に川村湊が著書名に採用した言い回しであり²⁹、また、同書をめぐって四方田犬彦が「生まれてもそこは異郷」（『新潮』2000年2月新春特別号）であるという論争を提起した点で、「在日コリアン」をめぐる議論を集約した語といえるかも知れない。

1998年になると、李良枝「富士山」が三省堂『新編国語2』に採用されている。生まれ故郷に対する葛藤を綴った文章では、「けれども、実はいとおしかった」という思いとともに、最後には「『고맙습니다（ありがとう。）』／同じつぶやきを、私は、この今も繰り返している。」と、韓国語でもあり日本語でもある彼女の言葉で締め括られる。「ふるさと」をめぐる在日コリアンの姿がここでも注目されている点で興味深い。

この年、桐原書店は伊集院静「風の径」と鷺沢萌「ポケットの中」を同じ教科書『探究国語Ⅰ 現代文・表現編』で採用した。指導書では「風の径」に関して、「この作品の学習で何より大切なことは、在日韓国・朝鮮人の問題を生徒たち各自の問題に読み換える方向を示してやることだろう」³⁰と記している。

この小説では、主人公の幼少期に出会ったヨングという在日コリアンへの思いが綴られている。その点でももちろん「在日韓国・朝鮮人の問題」が提示されている。だが、それを日本人である「生徒たち各自の問題に読み換える」には想像力を働かせ、「他者」へと思いを馳せるための工夫が必要となる。

注目したいのは作家の経歴の扱いである。教科書の単元末には、「一九五〇（昭和25）年～。小説家。山口県生まれ。広告代理店勤務を経て、フリーのディレクターとなり数多くのコマーシャル・フィルムを手がけた。コンサートの演出や作詞などでも活躍した後、文筆活動に専念。一九九二（平成4）年、「受け月」で直木賞を受賞した。」³¹とあるのだが、指導書では、作家の経歴について「在日韓国人二世（昭和49年帰化）」³²と記している。

では、なぜ桐原書店では伊集院静の出自について教科書と指導書で使い分けているのか。指導書においては、「参考」として「遠い昨日」について言及し、『風の径』の直前に位置する『泉のほとり』では、『私』が自分は日本人ではないと知ったときの〈思い出〉が語られる」点を挙げている³³。「泉のほとり」に登場する「私」も、「風の経」に登場する「私」も同じ人物であり、伊集院静を指す。したが

って、やがて「日本人」となる彼が幼少期を懐古する文章を、あえて帰化の問題を挙げずに教科書に提示するのは、教科書で初めて本文に接した際には日本人が在日コリアンをまなざすという位置から読むことを誘導した後、授業を通してその位置を問い直すための工夫であり、「在日韓国人・朝鮮人の問題を生徒たち各自の問題に読み換える」ための仕掛けだと考えられるのである。

1989年の次の学習指導要領の改訂は1999年である。教育課程審議会での審議はすでに1996年に始まり、1998年10月に文部省に答申されている。このときの改訂に当たっては、「ゆとり学習」の提言が大きく取り沙汰されたが、この「ゆとり学習」を含めた四つの基本方針のうち、最初に挙がっていたのが、「①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」³⁴であった。「風の径」の試みも、「国際理解」と「日本の伝統」への理解を求めた1989年の改訂とは異なる、新たな方針への対応と見るべきか、さらに検討したい問題である。

いま取り上げた1999年の学習指導要領改訂が科目編成等で実際に反映されたのは2003年以後である。この時期から新たに徐京植の随筆「さまよえる老婆」が教育出版で採用されている（2004年、2008年）。指導書では「教材のねらい」として、「本教材は、グローバル化が急速に進められる現代社会において、国民的単一性を基盤とした国民国家はどのような意味を持っているか、国家と個人はどのような関係にあるのか、などの問題を考えさせるエッセイであり、国際社会を考える際の大切な視点を提供している。」³⁵と説明されている。

同じ教育出版は、現行教科書である2008年発行の『新版 現代文』において、鷺沢萌の小説「グレイの層」とともに、姜尚中の随筆「大人への丸太 たじろがずに渡ってみよう」を採用している。ここでは、芥川龍之介の「侏儒の言葉」の一節「人生は一箱のマッチに似ている。重大に扱うのは莫迦莫迦しい。重大に扱わなければ危険である」（9頁）という引用が芥川の写真とともに掲載されている。次の教材であるリービ英雄「想像への畏敬」において外国人作家が日本の古典文学の魅力について語る文章を採用しているのと同様、日本に暮らす外国人と日本文学との接し方を日本人の高校生に示すという体裁となっている。これら二つの文章が教科書の冒頭に収録されていることから、在日コリアンをはじめとする「在日外国人」の文章を取り上げることの重要性を示す事例だといえるだろう。

本稿は日本の高校国語教科書に在日コリアン文学の採用される意義が、国民国家のイデオロギーを補強するための装置という点にあるのか、それとも多民族国家ないしは多民族共生をめざすという理念にもとづく革新的な試みにあるのかという疑問から出発した。中心を李恢成「砧をうつ女」に置いて考察しそこから見えてきたのは、植民地支配に対する歴史認識を国語教育の現場にも持ち込んで議論しようと

する試みや、民族的マイノリティ文学の特殊性よりも文学的表現の普遍性に注目するねらいだった。では、たとえば後者がそのまま国民国家のイデオロギー装置として機能しているのか、あるいは前者がその否定的、批判的存在たり得ているのかといえば、回答は簡単ではない。むしろ確認しておきたいのは、在日コリアン文学の採用過程において、二つの規準の間を往來する、あるいはそれらの基準をすり抜けようとする多様な試みが、「国際化」を謳った1989年以後の学習指導要領改訂とともに実践可能となったという意味での革新性であろう。さらには、こうした試みが教育現場でどのように扱われているのかという点を突き詰めていくことで冒頭の問いに十分な答えが得られるのではないかというのが、暫定的な結論である。

注

- 1 佐藤泉『国語教科書の戦後史』頸草書房、2006年、2頁。
- 2 北川茂治・市原菊雄編著『改訂 高等学校学習指導要領の展開 国語科編』明治図書出版、1990年、45頁。
- 3 『高等学校学習指導要領』文部省、1989年、13頁。
- 4 三省堂『高等学校国語Ⅰ 三訂版』1991年。
- 5 前掲『高等学校学習指導要領』13頁。
- 6 初出は『季刊藝術』1971年夏（7月）号。その後芥川賞受賞を経て、「人面の大岩」「半チヨッパリ」とともに小説集『砧をうつ女』（文藝春秋社、1972年3月）に収録された。日本書籍版は『芥川賞全集』第9巻（1982年）を典拠としている。角川書店版は初刊本（1972年）に依拠している。
- 7 阿武泉「高等学校国語教科書における文学教材の傾向」『国文学 解釈と教材の研究』、2008年9月。
- 8 同前、42頁。
- 9 同前、42頁。
- 10 日本書籍『新版 高校国語一』1994年、284頁。
- 11 日本書籍『指導資料 新版 高校国語一 現代文・表現編』1994年、378頁。
- 12 日本書籍『新版 高校日本史』1994年。
- 13 前掲『指導資料 新版 高校国語一 現代文・表現編』384頁。
- 14 前掲『新版 高校国語一』285頁。
- 15 同前、285頁。
- 16 李辰成『またふたたびの道・砧をうつ女』講談社文芸文庫、1991年、293-294頁。
- 17 角川書店『高等学校 新国語Ⅰの研究 教授資料⑥ 現代文編 六 小説（二）』1998年、

- 2頁。
- 18 角川書店『高等学校 新国語Ⅰ』1998年、101頁。
- 19 同前、101頁。
- 20 『朝鮮を知る事典』平凡社、1998年、「打令」の項を参照。
- 21 詳しくは、拙稿「拡散する〈身勢打鈴〉—李恢成「砧をうつ女」にみる朝鮮文化の変容—」（『第26回 国際日本文学研究集会会議録』国文学研究資料館、2003年3月）を参照されたい。
- 22 前掲『高等学校新国語Ⅰの研究 教授資料⑥ 現代文編 六 小説（二）』23頁。
- 23 野中潤「定番教材はなぜ読み継がれているのか——生き残りの罪障感と国語教科書」『国文学 解釈と教材の研究』、2008年9月。
- 24 同前、27頁。
- 25 石原千秋『国語教科書の中の「日本」』筑摩書房、2009年。
- 26 同前、51頁。
- 27 同前、33頁。
- 28 東京書籍『新編国語Ⅱ 現代文編 指導資料2（20分冊）』、1999年、6頁。
- 29 川村湊『生まれたらそこがふるさと 在日朝鮮人文学論』平凡社、1999年。
- 30 桐原書店『探求国語Ⅰ 現代文・表現編 指導資料（5分冊）第2分冊』1998年、93頁。
- 31 同前、111頁。
- 32 桐原書店『探求国語Ⅰ 現代文・表現編 指導資料（5分冊）第2分冊』1998年、88頁。
- 33 同前、88頁。
- 34 『高等学校学習指導要領解説 国語編』文部省、1999年、2頁。
- 35 教育出版『現代文 7～9単元 教授資料』2004年、15頁。

【資料1】 <「在日コリアン文学」国語教科書掲載作品一覧>

○中学校

作者名	作品名	収録教科書（収録年）
李相琴	半分のふるさと	東京書籍「新編 新しい国語2」（97） 東京書籍「新しい国語2」（02）
伊集院静	まき割り 夕空晴れて さつき	三省堂「現代の国語2」（93・97） 学校図書「中学校国語3」（02・06） 光村図書「国語1」（06）
鷺沢萌	ケナリも花、サクラも花	学校図書「中学校国語3」（02・06）

○高校

作者名	作 品 名	収録教科書（収録年）
李正子	短歌	三省堂「国語Ⅰ」（94） 筑摩書房「ちくま現代文」（96） 三省堂「新編国語Ⅰ」（98） 筑摩書房「ちくま現代文 改訂版」（00）
李恢成	砧をうつ女	日本書籍「新版 高校国語一」（94） 日本書籍「新版 高校国語一 二訂版」（98） 角川書店「高等学校 新国語1」（98）
李良枝	由熙 富士山	三省堂「高等学校国語1 三訂版」（91） 三省堂「現代文」（95） 三省堂「新編国語2」（99）
伊集院静	風の径	桐原書店「探求国語Ⅰ（現代文・表現編）」（98）
姜尚中	大人への丸太 たじろが ずに渡ってみよう	教育出版「新版 現代文」（08）
鷺沢萌	ほおずきの花束 灯りの下に 卒業 ポケットの中 指	旺文社「新国語1」（94） 尚学図書「新国語一」（94） 東京書籍「新編 国語2」（99） 第一学習社「高等学校 改訂版 新編 国語一」（98） 桐原書店「新標準国語1」（98） 桐原書店「探求国語Ⅰ（現代文・表現編）」（98） 桐原書店「展開国語総合」（03） 桐原書店「展開国語総合 改訂版」（07） 明治書院「高校生の国語Ⅰ」（98） 第一学習社「高等学校 改訂版 新現代文」（00） 第一学習社「高等学校 新編 国語総合」（03） 筑摩書房「精選国語総合 現代文編」（03） 明治書院「新編 国語総合」（03） 筑摩書房「精選国語総合 現代文編〔改訂版〕」（07） 明治書院「高校生の国語総合」（07）

	岸辺の駅 「私」という「自分」 グレイの層	旺文社「高等学校現代文」(04) 第一学習社「標準現代文」(08) 教育出版「新版 現代文」(08)
徐京植	さまよえる老婆	教育出版「現代文」(04) 教育出版「現代文 改訂版」(08)
柳美里	二十四時間の待ち合わせ	旺文社「国語総合」(02)
李禹煥	蛇 アクロポリスと石ころ 画家の領分	角川書店「高等学校国語2」(95) 角川書店「高校生の国語2」(99) 明治書院「高校生の国語2」(95) 明治書院「高校生の国語2」(99) 明治書院「新精選現代文2」(08)

※表の作成にあたっては阿武泉『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 13000』（日外アソシエーツ、2008年）、阿武泉『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品小・中学校編』（日外アソシエーツ、2008年）、「(国語総合)〈現代文〉現代文教材一覧」(『国語教室』大修館書店、may 2009)を参照した。